

氏名(本籍)	中本真生子 (奈良県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博論第138号
学位授与年月日	平成19年1月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 人間文化研究科
論文題目	アルザスにみる「国民意識」の変容とフランス —「最後の授業」からマルグレ・ヌまで—
論文審査委員	(委員長) 教授 渡辺 和 行 教授 山 辺 規 子 教授 小路田 泰 直 教授 三 野 博 司

## 論文内容の要旨

本論文は、フランスとドイツの係争の地であったアルザスの歴史を、国民国家論や「中心と周縁」といった視座を動員して分析し、ナシオンとフォルクのはざまで生きた「アルザス人の近代」を描いた研究である。7章からなる本論文の内容は以下のようである。

第1章「〈最後の授業〉再考」では、1871年のアルザスのドイツへの割譲が、フランスにおいてどのように受け止められ、またそれ以降のフランスの国民観、そして国民統合にどのような影響を与えたかという問題を、アルフォンス・ドーデの短編小説「最後の授業」、およびその続編「新しい先生」を中心に検討している。アルザスを、フランスのみならず世界に広めたこの物語を再考することによって、この時期のフランスにおいてどのような「アルザス」が必要とされ、どのようなメッセージが「国民」に届けられたのかを明らかにしている。

フランス「国民」再結集のシンボルともなったアルザスは、フランス語とは異なるアルザス語の問題や、アルザスの政治動向や心理状態を無視したまま、「フランスを愛しつづけるアルザス」として描き出され、多様な文化装置を通じて喧伝された。このアルザスの現実態と理想態の乖離が、第一次世界大戦後、フランスへの「復帰」に際して、アルザスに起こった混乱と、内地フランスとの対立の大きな原因となったことが、ドイツ統治下のアルザスの状況や、第一次世界大戦中のアルザス人の心理状況を検討することによって明らかにされた。

第2章「教科書の中のアルザス・ロレーヌ」では、第1章でみたアルザスのイメージ形成の実態を、第三共和政期の初等教育教科書から抽出し、同時に国民国家と教育の関係を考察している。その結果、

「アルザス」のシンボル機能がより一層明らかになると同時に、「国民の義務」としての「国防」や「兵役」の強調も明らかとなり、両大戦をドイツ側で戦ったアルザスが抱えざるをえなかったトラウマの一因を垣間見ることができる。

第3章「〈フランスを愛するアルザス〉の物語」では、前章まで検討してきた「フランスを愛しつづけるアルザス」像が、アルザス側からも形成された例として、アンシ HANSI の作品を論じている。「アンシおじさん」こと、ジャン＝ジャック・ヴァルツの作品とその人生を素材にして、アルザスから発信された「フランスを愛するアルザス」像が持つ問題性と同時にアルザスの重層性や多様性が解明された。

第一次世界大戦前夜、フランスが「アルザスそのもの」と信じたアンシの作品および彼の政治的立場は、実は当時のアルザスでは少数派に属するものであった。しかし「フランス向け」に書かれたイラストや絵本は大成功を収め、彼は「当時フランスで最も有名なアルザス人の一人」となる。それが、大戦後のフランスとアルザスの軋轢をより深める一因ともなった。また戦間期にはその影響力を失ったアンシの作品が、第二次大戦後のアルザスで復活し、現在もキャラクターとして使用されていることと、第7章で見る第二次大戦下でアルザスが被った体験およびその「トラウマ」との関係についても、第3章の末尾で考察している。

第4章「第一次大戦期におけるアルザスの〈国民意識〉の変容」では、ドイツ帝国時代のアルザス（＝アルザスのドイツ化過程）を概観した上で、フィリップ・ユセールの日記から読解できる当時のアルザスの状況と、ユセール自身の心情について考察している。その結果、ドイツとフランスの間で揺れ動きつつも、したたかに現実に対応するアルザス人の姿が浮き彫りになった。

第5章「〈ドイツ国民〉から〈フランス国民〉へ」では、前章同様ユセールの日記や他のアルザス人の回想録などを用いながら、第一次大戦終戦直後のアルザスの状況を生活史的に捉え直し、フランスへの同化政策が、どれほど大きな変化と混乱をアルザスにもたらしたのかを分析している。その結果、普仏戦争以来40年間ドイツ統治下で過ごしたアルザスのフランス化、さらにはアルザス人のフランス人化（＝国民化）が、暴力的な様相を呈したことが明らかになった。この問題は、第7章で論じるように、第二次世界大戦期に主客転倒した形でナチス・ドイツによって繰り返されるはずである。

第6章「アルザスのある家族史」では、これまで自治主義運動の観点から論じられてきた戦間期のアルザスを、あえてフィリップ・ユセールの「家族」の歩みから照射し、この時期のアルザスにおける「家族」の別離と、その心情に焦点を当てて叙述している。同時に、この時期の自治主義運動が抱えていた問題点にも目配りがなされている。ドイツとフランスに引き裂かれた家族は、それゆえに激しく平和を求め、また両方の国に「根」を持つ存在として自らを規定しており、その中で自治主義運動に対しては、どのような種類のものであれ「平和を脅かすもの」として距離を置いていることが分かった。そして、平和への願いが断たれ再び「ドイツ人」となることを求められた時、ユセール一家

がどのように対応したのかについて、「国民」意識およびアイデンティティの視点から再論されている。

第7章「マルグレ・ヌと〈国民的記憶〉」では、「アルザス最大の悲劇」とされる第二次世界大戦期のマルグレ・ヌ（ドイツ軍への強制召集兵）の体験を証言や残された手紙などから辿り、その一端を紹介すると同時に彼らの体験が現在どのように語られているのか、何のために語られているのかを考察している。

ナチス・ドイツによる「強制召集」については、その悲劇から半世紀を経た1990年代に入ってようやく当事者たちが重い口を開き、またそれが「歴史」の研究対象として取り上げられはじめた。しかし、「何のために語るのか」という視点からその証言や研究を振り返る時、そこにはアルザスに今なお燦り続ける憤りや苦痛とともに、アルザスと「国民的記憶」のねじれ現象も、また浮かび上がってくる。第二次世界大戦の体験は、かつてアルザスに見られた「国民／民族」意識の流動性や可変性、偏狭なナショナリズムに対する違和感などにアルザス自身が否定的な評価を下すという結果をもたらしたことが解明された。

終章に当たる「おわりに」では、アルザスの「記憶」と「歴史」の関係を象徴する今日的なメモリアル、すなわち2005年夏にシルメックに建設された「アルザス近現代史記念館」について考察し、オラドゥールの虐殺記念館との比較も念頭に置きつつ、「犠牲者」としての記憶から歴史への転換の意義を考えると同時に、アルザス近現代史を語ることの難しさとその重要さについて再確認を行っている。

以上が本論文の内容の要旨である。

## 論文審査の結果の要旨

ドイツとフランスのはざまに位置するアルザスの近代史が興味深いのは、地域史としてのおもしろさにあるだけではない。アルザスは、梶田孝道の3層構造（地域・国家・EU）の実験例として今日的重要性を持つのみならず、国民国家論的な視座からも重要な歴史を提供している。さらに、1970年代以降の社会史パラダイムがマイノリティやマルジノーの領域を切り開き、ウォーラステインの「中心と周縁」モデルがそうした動向に裨すに至った。ここにこそ、本論文の研究意義と研究史上の位置がある。

本論文は、仏独両国の係争の地であったアルザスの歴史を、国民国家論や「中心と周縁」といった視座を動員して分析し、「ナシオン nation」と「フォルク volk」のはざまで生きた「アルザス人の近代」を描いた研究であり、全体は7章からなっている。

第1章「〈最後の授業〉再考」では、1871年のアルザスのドイツへの割譲が、フランスにおいてどのように受け止められ、またそれ以降のフランスの国民観、そして国民統合にどのような影響を与えたかという問題を、アルフォンス・ドーデの短編小説「最後の授業」、およびその続編「新しい先生」を中心に検討している。フランスのみならず世界にアルザスを広めた「最後の授業」と、忘れ去られた「新しい先生」を再考することによって、この時期のフランスにおいてどのような「アルザス」像が必要とされ、どのようなメッセージが「国民」に届けられたのかを明らかにした。

つまり、「対独復讐」というフランス「国民」再結集のシンボルともなったアルザスは、フランスでは、フランス語ではないアルザス語の問題は無視され、さらに、アルザスの政治動向や心理状態とは無縁な「フランスを愛しつづけるアルザス」として描き出され、多様な文化装置を通じてそのイメージが喧伝された。こうしたアルザスの現実態と理想態の乖離が、第一次世界大戦後のフランスへの「復帰」に際して、アルザスが直面した混乱と、内地フランスとの対立の大きな原因となったことが、ドイツ統治下のアルザスの状況や、第一次世界大戦中のアルザス人の心理状況を検討することによって明らかにされた。第1章は、『思想』に発表されて高い評価を得た論攷である。

第2章「教科書の中のアルザス・ロレーヌ」では、第1章でみたアルザスのイメージ形成の実態を、第三共和政期の初等教育教科書を3期に分けて抽出して検討している。その結果、「アルザス」のシンボル機能がより一層明らかになると同時に、「国民の義務」としての「国防」や「兵役」の強調も明らかとなり、両大戦をドイツ側で戦ったアルザスが抱えざるをえなかったトラウマの一因を垣間見ることができる。

第3章「〈フランスを愛するアルザス〉の物語」では、前章まで検討してきた「フランスを愛しつ

づけるアルザス」像が、アルザス側からも発信された例としてアンシ HANSI の作品を論じている。「アンシおじさん」こと、ジャン＝ジャック・ヴァルトの作品とその人生を素材にして、アルザスから発信された「フランスを愛するアルザス」像が持つ問題性と同時にアルザス人の心理構造の重層性が解明された。

第一次世界大戦前夜、フランスが「アルザスそのもの」と信じたアンシの作品および彼の政治的立場は、実は当時のアルザスでは少数派に属するものであった。しかし「フランス向け」に書かれたイラストや絵本は大成功を収め、彼は「当時フランスで最も有名なアルザス人の一人」となる。それが、大戦後のフランスとアルザスの軋轢をより深める一因ともなった。また戦間期にはその影響力を失ったアンシの作品が、第二次大戦後のアルザスで復活し現在もキャラクターとして使用されていること、第7章で見る第二次大戦下でアルザスが被った体験およびその「トラウマ」との関係についても、第3章の末尾で考察している。

第4章から第6章は、第一次世界大戦から戦間期にかけてのアルザスの新たな国籍変更をめぐる混乱と、その渦中における人々の意識のあり様を、ミュルーズの小学校教師であったフィリップ・ユセールの日記を参照しながら辿り、「国民化」をめぐる矛盾と対立、その中でアイデンティティの変容を検証している。第4章「第一次大戦期におけるアルザスの〈国民意識〉の変容」では、ドイツ帝国時代のアルザス（＝アルザスのドイツ化過程）を概観した上で、フィリップ・ユセールの日記から読解できる当時のアルザスの状況と、ユセール自身の心情について考察している。その結果、ドイツとフランスの間で揺れ動きつつも、したたかに現実に対応するアルザス人の姿が浮き彫りになった。

第5章「〈ドイツ国民〉から〈フランス国民〉へ」では、前章同様ユセールの日記やその他のアルザス人の回想録などを用いながら、第一次大戦終戦直後のアルザスの状況を捉え直し、フランスへの同化政策が、どれほど大きな変化と混乱をアルザスにもたらしたのかを分析している。その結果、普仏戦争以来47年間ドイツ統治下で過ごしたアルザスのフランス化、さらにはアルザス人のフランス人化（＝国民化）が、暴力的な様相を呈したことが明らかになった。この問題は、第7章で論じられるように、第二次世界大戦期に主客転倒した形でナチス・ドイツによって繰り返されるはずである。

第6章「アルザスのある家族史」では、これまで自治主義運動の観点から論じられてきた戦間期のアルザスを、あえてフィリップ・ユセールの「家族」の歩みから照射し、この時期のアルザスにおける「家族」の別離と、その心情に焦点を当てて叙述している。同時に、この時期の自治主義運動が抱えていた問題点にも目配りがなされている。ドイツとフランスに引き裂かれた家族は、それゆえに激しく平和を求め、また両方の国に「根」を持つ存在として自らを規定しており、その中で自治主義運動に対しては、どのような種類のものであれ「平和を脅かすもの」として距離を置いていることが分かった。そして、平和への願いが断たれ、再び「ドイツ人」となることを求められた時、ユセール一家がどのように対応したのかについて、「国民」意識およびアイデンティティの視点から再論されて

いる。

第7章「マルグレ・ヌと〈国民的記憶〉」では、「アルザス最大の悲劇」とされる第二次世界大戦期のマルグレ・ヌ（ドイツ軍への強制召集兵）の体験を証言や残された手紙などから辿り、その一端を紹介すると同時に彼らの体験が現在どのように語られているのか、何のために語られているのかを考察し、「歴史と記憶」の問題に切り込んだ研究である。

ナチス・ドイツによる「強制召集」については、その悲劇から半世紀を経た1990年代にようやく当事者たちが重い口を開き、それが「歴史」の研究対象として取り上げられはじめた。しかし、「何のために語るのか」という視点から、その証言や研究を振り返る時、そこにはアルザスに今なお燃り続ける憤りや苦痛とともに、アルザスと「国民的記憶」のねじれ現象も、また浮かび上がってくる。第二次世界大戦の体験は、かつてアルザスに見られた「国民／民族」意識の流動性や可塑性、ナショナリズムに対する違和感などにアルザス自身が否定的な評価を下し、「被害者としてのアルザス人」意識が、逆に、フランスの「国民的記憶への回収」という結果をもたらしていることが論じられた。

「おわりに」では、アルザスの「記憶」と「歴史」の関係を象徴する今日的なメモリアル、すなわち2005年夏にシルメックに建設された「アルザス近現代史記念館」について考察し、オラドゥールの虐殺記念館との比較も念頭に置きつつ、「犠牲者」としての記憶から歴史への転換の意義を考えると同時に、アルザス近現代史を語ることの難しさとその重要性について再確認を行っている。第7章と「おわりに」は、留学の成果が活かされた論攷である。

論者は、本論文において、アルザスの歴史を単なる地域史ではなくて、「中心と周縁」の地政学や政治力学にも目配りしつつ、さらに国際関係史的な視点も失わず、アルザスに住む人々の心性にまでおりて、アルザス人のアイデンティティ複合を描ききった。この意味で、本論文は、今後のエリア・スタディーズのモデルとなる研究といっていよう。

他方で、アルザスという研究対象に切り込み、器用に整理する論者の研究能力は高く評価できるが、視点の壮大さがやや空転してこちんまりと着地してしまったという批判も出された。また、引用にやや荒さが見られる点や、ナショナル・アイデンティティの分析はあるが、アルザス・アイデンティティについてもう1-2歩掘り下げる必要がありはしないか、「中心と周縁」という位置づけ自体、国民国家的枠組みではないのか、4つの性格の違う史料を時系列的に並べる史料操作に問題はないのか等のコメントもなされた。

ともあれ、以上の7つの章はすべて雑誌に公表済みであり、第1章が『思想』（887号、1998）、第2章が中谷猛編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』（晃洋書房、2003）、第4章が『寧楽史苑』（43号、1998）、第5章が西川長夫編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』（柏書房、1999）、第3章と第6章と第7章が『立命館言語文化研究』（順に、第12巻3号、2000、第14巻3号、2001、第15巻4号、2004）に掲載され、学会で評価を得た論攷も多い。なお本論文は、来年度に晃洋書房か

ら出版予定である。

以上、審査委員会は、論文提出者 中本真生子を奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するにふさわしい者と認定した。